

学生たちと溝の長さを確かめる山本さん(右)＝多治見市虎溪山町で



平安の窯で茶わん焼けるか

愛院大・山本さん 多治見で復元し検証



多治見市虎溪山町の山林で、愛知学院大非常勤講師の山本智子さん(三巴)が、考古学の研究の一環で平安時代の窯の復元に取り組んでいる。山本さんによると、学術的な記録が残る範囲では、これまでに平安時代の半地下式の窯の復元に取り組んだ例はなく「実際に茶わんが焼けるのか検証してみたい」と話す。(片岡典子)

昨夏から作業、今秋にも完成

多治見市虎溪山町の山林で、愛知学院大非常勤講師の山本智子さん(三巴)が、考古学の研究の一環で平安時代の窯の復元に取り組んでいる。山本さんによると、学術的な記録が残る範囲では、これまでに平安時代の半地下式の窯の復元に取り組んだ例はなく「実際に茶わんが焼けるのか検証してみたい」と話す。(片岡典子)

窯は山の斜面などにトンネルのような穴を掘って造る窯。国内では主に古墳時代―室町時代に、陶器などを作るのに使われた。地中に穴を掘る地下式や斜面に溝を掘って天井をつける半地下式がある。県内や愛知県をはじめ全国で窯跡が確認されている。山本さんは十二―十五世紀ごろの美濃の窯を専門とする。今回、山本さんの恩師で、愛知学院大の藤沢良祐教授が、虎溪山永保寺所有の山林で別の窯を造っている多治見市小名田町の陶芸家青山双溪さん(モミ)から誘われたのをきっかけに窯の復元に取り組むことにした。復元の基にするのは関市のぞみヶ丘の深橋前遺跡から発掘された窯跡。全長約五・六メートル、幅約一・三メートルの半地下式窯で、九世紀末―十世紀中ごろに使われていたとみられる。付近では植物の灰を原料とした釉薬をかけた灰釉陶器のわんや皿などが見つかった。当時の状態を比較的好く残していたことから、山本さんは、この窯を復元することにした。設計図の作製など半年ほどの準備期間を経て、昨夏に作業に着手。大学内での勤務の合間を縫い、学生の助けも借りながら、これまでに幅一メートル、長さ五・六メートル、深さ七十センチほどの溝を掘った。窯跡の発掘調査の報告書を基に、内部の傾斜の角度などを再現している。現在は昨年末の雨で流されてしまった溝の壁の復旧作業をしている。復旧が終わると、溝にまきなどを詰め、上から土を固めて、地上部分の壁や天井部分を作り、早ければ今年秋の完成を目指す。天井が崩れずに窯が造れるのか、器を焼くことができるのかはまだ検証されたことがないという「これまでの発掘調査で分かっていた予想を証明できるのか楽しみ」と話す。